

2006年勁草学舎課外ワークショップ in 埼玉 特集

去る9月29・30日、10月1日の3日間、前号で告知しておりました「課外ワークショップ in 埼玉」を、埼玉県国立女性教育会館（又エック）にて開催いたしました。日程を2泊3日と昨年より1日増やした上、内容的にも、「小中学生の部」を新たに設けたこと、箱庭ルームを現地にそのまま出張させたこと（驚かれた方も多かったのではないかと思います）、大人・青年合同の企画「親子バトル」の新設など、前年のものよりひと回りもふた回りも大きな規模での開催となりました。最終日はあいにくの大雨に見舞われ大変な帰路となってしまいましたが、しかし全体としては、各世代多くの参加者に恵まれ、日常の生活から離れた3日間、それぞれ有意義で濃密な時間を過ごしていただけたのではないかと考えています。本号では、こうして無事に日程を終えました「課外ワークショップ in 埼玉」について特集させていただきます。現地での雰囲気がいずれも伝われば、と思います。

課外ワークショップ開催の意味

今年度も課外ワークショップを開催しました。

昨年は講義形式を主としたものでしたが、今年度は実践を重視したものとしました。理由は、最近人間関係の中での“やりとり”の貧困さを感じる事が多く、これでは子どもも大人も精神的に健全ではなくなるだろう、そして結果的には生きるバイタリティーが低下することになり、創造的に生きることなど不可能になるのではないかと危惧するようになったからです。

街中でも電車内でも、無表情の顔やイライラした雰囲気を露呈している人々をよく見かけます。一方昔には出会っていた味わい深い皺を刻み込ませた魅力的な老人の顔に出会うことはなくなりました。都会だからなのかもしれませんが、これは現代に生きる私たちの精神が幼稚化したと言えるのではないかと思います。

エリック・バーンが提唱する「交流分析」では、『人々は、眠っている時間を除いて自分が満足し何かを達成するために時間を組み立てて使う。対人関係の中では人間が時間を処理するのに六つの方法がある。それは「引きこもり」「儀礼」「活動・仕事」「社交・雑談」「ゲーム」「親密」である。「親密」とは、人々がお互いに与え分かち合うことによってもたらされるものであり、そのためには危険を冒しても心を開き、お互いが相手に対する高い関心と人格的関わりをすることから創り出される、いわば人と人との出会いである。「親密」は成長し合える信頼関係によってもたらされる関係であり、「親密」を求める能力を回復することが、「交流分析」の主要なゴールである』と述べています。

勁草学舎内でのやりとりを観察していると、「儀礼」や「活動・仕事」「社交・雑談」の域が多いように思います。相手——人間とは限らず物事や教科や本の内容など見えない物も含む——と親密な関係になるためには、お互いが納得するまで“やりとり”することが必須でしょう。ただ一方的に相手を鵜呑みにすることは、未消化の食べ物が栄養にならないのと同様、精神的糧にはならないはずで、相手と何度もやりとりをすることが、相手を噛み砕き消化して自分の精神的

栄養として取り入れることになる、という観点から、非日常体験としての課外ワークでは、「親子＝親子バトル」、「子ども同士＝構成的エンカウンター」、「自己対自己＝夢と箱庭・教科学習」のやりとりを重視した組み立てとしました。

日常の勁草学舎では授業時間が決まっているために、自習室で勉強する生徒は別として、殆どの生徒はその曜日にしか出舎してきません。従って人間関係はどうしても狭く少ないものになってしまいます。生徒はスタッフとの関係は深められたとしても、仲間同士の関係においてはコミュニケーション的には量も質も不足した状態で過ごしています。

勁草学舎内に居る時はそれでよしとしても、それでは勁草を出た後に不安が残ります。子どもは勁草の入口に入ってきた時から、出て行くまでの階段を着実に登っていかねばなりません。その階段の勾配は子どもによって差があります。ところが日常の中だけでは、その階段の勾配の差やどれだけの階段を登らなければならないのかについて、本人に気づかせることは非常に難しいのです。

課外ワークショップでは、日常的には観察できない子どもの側面が露わに表現される、いわゆるアクシデントとして表出されたり、反対に寝食を共にすることによって観えてくる子どもの長所などに触れることができ、そのことをその後の日常生活に般化させることによって、特にメンタル面では大きな飛躍につながることを期待できます。



今回は「夢と箱庭」を入れました。目的は「自己と向き合う」ことでした。私自身 10 年以上前になりますが、“夢のワーク”に参加したことがあります。その経験をここで紹介してみます。

当時は鳥取に住んでいました。夫が亡くなり、その後をどう過ごせばいいのか模索している時でしたから、何かプラスになるかもしれないとの思いから、カウンセリングを少し勉強してみようと“関西カウンセリングセンター”に通うことを決断したのです。鳥取から大阪まで週一回通うのは、私にとっては経済的にも大変なことでしたが、今、その決断は正しかったと思っています。そのプログラムの中に“夢のワーク”はありました。自分が実際に見た夢を三つ持参して臨むというものでした。

夢①薄暗い部屋に私は立っていて赤ん坊を抱いていました。その赤ん坊の首に私のバックの紐が掛かり、赤ん坊は息絶え絶えでした。そして私は赤ん坊を抱いたまま、暗い階段を下に向かって降りていきました。気持ちはとても沈んだものでした。

夢②住んでいた診療所兼自宅の建物から荷物を出している、つまり引越しをしている夢でした。

夢③白衣を着た亡夫と私が二人で自宅の前に立っており、建物を眺めていました。亡夫の表情は穏やかで、三階建ての建物のどの窓からも光が射していて眩しいくらい明るかったのです。私の気持ちはとても平穏でした。

講師の菅田先生は、「更年期とは、子どもが育ってしまって空虚になった心の中にもう一度子どもに代わる何かを育てようとする時期です。だからこのワークに参加している同じ年代の方々の夢には殆ど乳幼児が出ています。井澤さん、あなたは一つの役割を終えられました。それも明るいのが救いです」というコメントを下さいました。

この「一つの役割を終えた」とのコメントが、また「私にとって子どもに代わる何かは息絶え絶えである」というメッセージが、私に東京へ居を移すことを決意させました。息子も娘も既に鳥取には住んでいない状況で、九州生まれの私が一人そのままこの地で過ごすことは正直しんどかったのです。しかし「～すべき」という世間的常識から脱却することができず悶悶とした時を過ごしていた私の肩を、菅田先生はそっと押ししてくださいました。

現在、勁草学舎で仕事をさせていただき、最後の人生を私らしく生きさせてもらっています。あの時「夢のワーク」に出会い、菅田先生からコメントを頂戴できたことに感謝しています。

課外ワークを終え子どもから「あんな大勢の中で、しかも初めて出会う人達の中で、自分が発言できるとは思ってもみなかった」とか、小・中生からは「楽しかった」などと感想を貰いました。ただ「親子バトル」では、子ども側からの活発な主張や批判に対して、親側の反論はあまりに貧弱でした。若者たちは、自分の発言が偉そうだったのだろうかなど、自己嫌悪に陥っている者も居ます。

親たちにとっては、今回の課外ワークで今後の課題が表面化しました。Sさんは、

- ① 子どもからの発言を聴いても自分の内面で動くものがない。だから反応できない。
- ② 何となく漫然とした何かは感じているけれど、それを言語化できない。
- ③ 大勢の他者の前では恥ずかしくて発言できない。

と具体化されました。幾層にも邪魔している悪しき習慣から脱却するための今後の学習課題が観えました。親の精神的バイタリティーをアップさせ、リズムあるやりとりができることは、子どもを元気にするためには必要なことです。子どもに学ぶ姿勢でお互いに努力を続けましょう。

また課外ワークショップは、勁草学舎のスタッフにとって、この一年の成長を確認できる機会でもありました。ご参加くださった皆様方のご協力の賜物だと真摯に受け止めております。これからも何卒ご協力くださるようお願い申し上げます。ありがとうございました。

勁草学舎主任カウンセラー・親子マンボウの会代表 井澤 真智子

<2006年勁草学舎課外ワークショップ in 埼玉 全日程表>

		大人	青年	小中学生
9/29 (金)	午後	若者とのやりとり	学習	オリエンテーション 夢・箱庭のワーク
	夜間	若者とのやりとり	学習	ワーク・学習
9/30 (土)	午前	リラクセーション		
	午後	夢・箱庭のワーク	やりとり	制作ワーク
	夜間	やりとり	夢・箱庭のワーク	ワーク・学習
10/1 (日)	午前	親子バトル		ワーク・学習
	午後	親子バトル		ロールプレイング 修了式

各ワークの報告

親子バトル (10月1日 午前・午後)

大人・青年の部合同企画

井澤

「親子バトル」の目的は、次の二点でした。

- ① 子どもは親（権威者）に反抗する課程を通過しながら大人への道を歩いていくものですが、自分の親に対して反抗できないと、子どもはどうしても自己主張が弱くなります。自分の親には向けられなくても、親世代に向けて「言いたいことを言ってみる」体験から、子どもが元気に自己主張できるようになればいいなあ、との思い。
- ② 人間（大人）は「自己と対峙」しながら生きていくものですが、「自己對自己」は思春期の大きな課題です。それができるようになるためには、親が子どもと真正面から向き合わなければなりません。「我が子とは難しくても、他の子どもとならば向き合える」、という体験を通して、我が子と対峙出来る親になっていただきたいなあ、との思い。

結果として子どもたちは、自分の中にこれまで置いてきた事柄や欲求を精一杯そして真剣に親たちに向けて語ってくれました。残念ながら親たちは、それを受けて立つことができませんでした。でも親にとっての課題がはっきりしたことは大きな収穫でした。今後の学びの方向が観えましたから。動きを止めていた子どもが、WS 直後親元を離れて一人で動き始めましたし、親との関係をすっきりさせ自分の勉強に熱中するようになった子もいます。“感情”に動きが出れば“行動”に変化が生じるのです。若者たちとのやりとりを面白いと感じられる大人になれば、今後の人生は楽しくなりますよ。井澤のように。

伊藤

親の側が遠慮していたのではないのでしょうか。こんなことを言ったら傷つけるかもしれないなどの勝手な想像のためでしょうか、適切な距離が取れていないと思いました。子どもたちは、そういう偽善的な言動は全てお見通しなので、イラつきます。子どもは、全身全霊での関わりあいを求めています。そこに良い悪いという判断はいりません。真剣でありさえすればよいのです。親の意見や提案には正解・不正解があるかもしれないが、親の思いには正解・不正解はありません。真剣な真正面からの思いこそが子どもを突き動かす。そういう意味では、親側の真剣さが弱かったのではないのでしょうか。そうは言っても、私自身も偽善的あるいは儀礼的になっている危険性もありますので、子どもの前では常に真剣であらねばと、改めて肝に銘じた次第です。



柴本

子供たちが大人に対して感じていること、思っていることをそのままぶつけていた姿はとても印象的で、バトルの時間を自分たちのものにしようと真剣に取り組んでいたと感じました。親側はその時間をどのように使うべきなのかについて、全体としても、個人個人にしても意識が低かったように感じました。そのためお互いにとって消化不良になってしまったことは否めないと感じました。「感じたことを素直に」、かつ、「明確なメッセージを持って」、相手とコミュニケーションを取ることが子供たちのほうができていたと感じました。そうしたコミュニケーションの大切さを、子供に接している一人の大人として改めて感じました。

佐藤

親子バトルを観察していて、実にさまざまな思いが浮かんできました。青年たちに対して、荒削りではありますが、等身大の自分で精一杯大人に勝負を挑んでいた姿はとてたくましく、感動を覚えました。自分と比べて、彼らに対してうらやましさも感じました。一方、大人たちは、ちょっと青年の勢いに押されてしまったかなあとと思います。全体的に引き気味だったので、もうそうになってしまうと『その場の感情』なんていうものはどこかに行ってしまう。言われ放題に言われて腹が立った場面なんていうのもあっただろうに、発言自体も少なかったのも、一人一人の存在感がまったく違っていました。大人たちは、一人として存在しようとしているのではなく、全体の中に埋もれようとしている、そんな印象すら受けてしまいました。非難をしようとしているわけではないのですが、大人としての変なこだわりやプライドを捨てて、“その時その場の対話”をしようとする姿勢が必要だったのではないのでしょうか。

篠崎

ある若者から『相手に発したことばは自分に返ってくる』との発言がありました。これはあの場にいた真剣な表情の若者全員の思いだったのではないかと感じました。発言が無かった若者も行動が変化しました。きっと子ども達は等身大の自分とも対話しながらあの場に居続けたのだろうと想像に難くありません。さて、大人側からの肉声は残念ながら少ないまま終了しました。若者たちは初めから発言できていたわけではありません。まして人としての生き方はこれから学んでいく者たちです。しかし『今』の自分が感じ、考えていることを生々しく語りました。大人の『反省』は行動に結びつけなければ自己憐憫に繋がるとは思います。どう思われますか？

西中

生徒達のまっすぐで一生懸命自分の思いを伝えようとする姿勢に驚き、心を動かされました。それは生徒達の「お互いの思いを伝え合いたい」「やりとりをしたい！」という気持ちがしっかりと彼らの言葉にのせられていたからだと思います。私自身、自分の親とここまでまっすぐに向き合っているだろうかと恥ずかしく思いましたし、負けてはいられないという気持ちになりました。一方、大人側からはその場で感じたことをそのまま言葉にするということがほとんど見られないまま終了となりました。私も日常の生徒とのかかわりの中で、感じたことをそのまま表現することの難しさを痛感していたため、教師や親という役割を通してではなくもっとお腹の底から出てくる感情をキャッチし表現できるようにならないければ、生徒や子どもにとってはもちろんのこと、自分自身にとっても心地よいやりとりにならないのだろうと改めて実感しました。

青年・学習の時間（英語授業）（9月29日 午後・夜間）

担当：伊藤・柴本

普段、勁草では個別で授業をすることが多いのですが、今回の課外WSでは、模試の成績などを参考にして2つのクラスに分けて授業を行いました。また、授業時間については、勁草では1コマ90分ですが、その倍の時間が取れるということで、模試の解説や基本的な知識の見直しなど勁草での授業ではなかなか時間的に扱いきれない内容を扱いました。具体的には以下の内容です。



《伊藤担当クラス》

- ・ 文法…中学内容の復習、整序英作文問題
- ・ 読解…中3レベル～高認レベルの問題

問題をできるだけ多く解くことに重きを置きました。問題を解くときに、学習した内容をどのように使っていけばいいのかを習得することが目的でした。また、読解も入試問題を読みこなすための基礎的な事項を学習しました。



《柴本担当クラス》

- ・ 模試解説…9/24に実施した私大模試の解説
- ・ 文法…今年受けた模試の文法題の復習

復習を徹底させることで「知らないことを減らすこと」を目的とした授業を進めました。生徒は学習した内容を何となくは覚えているけれども、あいまいなままにしていることが非常に多いことがわかりました。わからないものをそのままにしない姿勢が大切であることを身にしみて感じてくれたのではないかと思います。

実際に授業に入る前は、教えるこちら側としても、午後3時間+夜2時間の合計5時間の長丁場、普段の授業には無い長さということもあって、一体どうなることかと心配をしていました。生徒の集中力が途切れたら…、問題が早く終わってしまったら…などと考えていました。

しかし、結果としては、その心配は杞憂に終わりました。中には「アッという間でしたよ」と言ってくれた生徒もいました。それだけ一生懸命に集中して聞いてくれていたのかと思うとこちらもうれしい気持ちになりました。

入試本番まであと4ヶ月ほどですが、ヌエックで勉強した内容をしっかりと頭に刻み込んでいくためにも、これまで以上に勁草や家で勉強を続けていって欲しいと思います。

リラクゼーション（9月30日 午前）

担当：伊藤・Tさん（勁草学舎OG）

課外ワークショップでは恒例となりましたリラクゼーションです。今回は卒業生である Tさんが一部講師を務めてくれるという新企画がありました。彼女は大学で演劇を学んでいるのですが、大学の授業で学んだことが、勁草の活動とつながると感じたそうです。そこに端を発し、講座の一部にまで実際に発展していきました。我々スタッフは、常に本当の意味での「学び」を目標にしていますので、彼女からの提案は、非常に喜ばしいことでした。そして、彼女の実践は今までとは少し違う切り口だったので、新鮮味で味わい深い内容になりました。Tさん、ありがとう！

今回のリラクゼーションには、二つの目標がありました。まず一つ目は、身体をゆるめ解放することです。従来のリラクゼーションでも繰り返しお伝えしてきたことです。自分の緊張状態を意識すること、その緊張をほぐすためのいくつかの方法をお伝えしました。無駄な緊張のない、解放された自分で生きることは、本来の自分の能力をいかんなく発揮することにつながります。既に、かなり実感を得られた方もいらっしゃいました。日々の生活の中で実践しつづけてください。



二つ目の目標は、他者を信頼することを通して、自分を信頼することです。これは今までにない視点であり、卒業生の Tさんが提供してくれたプログラムがあればこそ実現できたものでした。

子どもたちや親御さんを見ていると、自分を信頼できていないがために、自分を否定したり他者を否定したりしているのではないだろうか、と感じることが多々あります。これでは、自信をもって生きられないでしょうし、円滑な人間関係を築くのは難しいでしょう。しかし、そうは言っても、自分を信じられるようになることは、そんな簡単なものでもありません。

そこで、自分のからだを思い切って他者に預けてみたら、意外と大丈夫だった！という経験を通じて、他者に対する信頼感を得られないだろうか？そこから、引いては自分に対する肯定感を得られるのではないだろうか？という仮説を立てました。その仮説を実証するためのワークとして、小グループに分かれ、一人が背中から倒れ、数人でそれを支える、というワークを行いました。この支え・支えられるという関係は、人間関係のミニチュア版と考えています。すると、不思議だったのは、この子にはできないのでは？と思っていた子ができ

たりしました。

このワークの効果の如何を問うのは、まだこれからでしょう。しかし、思い切って倒れることができた人にも、支えることのできた人たちどちらにも笑顔が見られ、思わず拍手が出ているグループさえもありました。自然にこういった行動が出て、周囲も同調するということは、とても重要なことです。今回の支え・支えられているという実感を大切に抱えていてほしいと切に願います。

箱庭・夢のワーク（9月30日 午後（大人）・夜間（青年））

担当：篠崎（夢）・佐藤（箱庭）

今回の課外ワークショップでは、新たな試みのひとつとして『箱庭・夢のワーク』を設定しました。結果的に、自己理解を深めるためのひとつのツールとして、とても有効なものだったように感じています。

箱庭と夢の共通点は“非言語”に注目することです。人間同士のコミュニケーションでは、〔言葉の意味7%/声の調子38%/その人が持つ雰囲気55%〕で情報が伝わると言われます。なんと情報伝達の半分以上が“非言語”なのです！

私たちは、たぶん自分たちが思っている以上に、非言語的世界に身をおいています。自分に迷うことがあったとき、内なる自分からの非言語的表現（イメージや感覚など）に目を向けてみると、意外と簡単に答えが見つかるのかもしれません。



○各ワークの振り返り○

〔箱庭〕

大人の箱庭では、箱庭を利用しての自己洞察に加えて、『観察』も行いました。自分のイメージを表現することや自己洞察が意外と難しいこと、他者の表現を受けとめて、自分が感じたことをフィードバックする難しさなどを感じられた方が多いようでした。大人の方が非言語的表現やキャッチが苦手なようです。

ハードスケジュールの中で、夕食後の一番眠い時に行ったので、青年たちは皆グロッキー状態での箱庭でした（笑）。それでも、作成をはじめると真面目に、楽しそうに作っていました。作成後、観察者とともに話し合いをしましたが、熱く自分の作品を語ったり、思わぬ感想を聞いて新しい自分を発見したりできたようでした。

子ども（小中学生）の箱庭では箱庭療法の起源通りに、おもいっきり遊んでもらいました。合作を作ったり、自分の好きな風景を作ったりと、楽しんでいたようです。

〔夢〕

夢は自身が十分に気づいていない感情や生活態度や問題に直面させてくれる機能があります。また、自身に不足・欠けている要素や新しい可能性を補償的に体験もさせてくれます。つまり夢は本質的に夢を見た本人の盲点をついてくるものなのです。ですから見た夢を勝手に解釈せずに大事に抱えるように持ち続けることが、自己との対話に繋がっていきます。夢とは自身の中からのメッセージであること、目を開いている時間（意識的時間）と大きく関係することを中心に今回はお伝えしました。現場でいくつかの夢とお付き合いしました。いずれの夢主さんもお自身が読み解かれていく過程で意識的時間での行動とリンクさせ自己洞察されていたように感じました。このWS以後、意識的時間内の行動が変化するとそれが夢の変化に反映されることを体験された方もいらっしゃいました。

来年1月「箱庭と夢の講座（仮題）」を準備中です。ぜひ『内なる自身のメッセージ』を聴いてください。



小中学生の部

担当：浅井・満

今年の課外ワークショップでは、昨年にはなかった「小中学生の部」を設けました。日頃勁草学舎に通ってくれている小中学生に、週数回の授業時間だけでは出来ない体験をしてもらうために、2泊3日の時間を使って、様々なワークや体験、学習の機会を作りました。参加してくれた生徒たちそれぞれが抱えている生活上のいろいろな困難等を考慮して、次のようなことを大目標に、3日間の時間を組み立てました。

- ・ 決められた時間通りに行動すること。就寝・起床・食事・入浴時間等の徹底。
- ・ 小グループ内で、自分の役割を意識する。周りの人のことを考える。
- ・ 自習できない習慣からの脱却。
- ・ 非日常的な時間の中での、新しい自分の発見。

具体的な内容は以下の通りです（都合上、当初の予定を変更した部分があります）。

9月29日（金）

<午後の部：オリエンテーション、自己紹介、夢・箱庭のワーク>

まずはじめに、これから3日間どのように過ごしてもらいたいか、あと、具体的なスケジュールについて説明し、それからそれぞれ自己紹介のシートを記入してもらい、それを使って、ペアになってもらって他己紹介をしてもらいました。夢のワークでは、なにげなく見ている“夢”に、一体どんな意味があるのかについてのレクチャーを皆興味深げに聞いていましたし、箱庭のワークについては、先の報告の中にもありますが、皆自由に楽しく制作することができました。

<夜間の部：グループ音読、個別学習>

夜間の部は今回「学習」の時間と設定しましたが、時間の前半は、参加者みんなで、「ちびまる子ちゃん」の台本を、役を決めて音読する、という、小グループならではの企画に取り組みました。みんなどれぐらいのってくれるかなあ、と少々気掛かりでしたが、いざ蓋を開けてみると、それぞれ自分の役を楽しんでくれ、とてもよい雰囲気になりました。後半は、それぞれ一人一人に分かれて、静かな環境で個別の学習に取り組んでももらいました。

9月30日（土）



<午前の部：リラクゼーション（本誌 11 ページ参照）>

<午後の部：制作ワーク（紙粘土）>

2日目の午後は紙粘土で自由に遊びました。一応テーマを「動物園」としていたのですが、実際は“謎の生き物”だらけのおかしな空間が出来上がりました。紙粘土に先駆けてウォーミングアップとしてやった、トイレットペーパーでの「ミイラ作り」も、傑作でした(↓)。

<夜間の部：グループ音読、個別学習>

昨晚同様、「ちびまる子ちゃん」の台本を使ってグループ音読を行いました。初日より少ない人数での音読でしたが、みんな慣れてくれたようで、それぞれがキャラクターの特徴をつかんで、おもしろおかしく読み上げてくれました。



10月1日（日）

<午前の部：ウォーミングアップ、個別学習>

3日目の朝は、ウォーミングアップのワークをいくつかやった後、個別の学習に多くの時間を割きました。1人での勉強時間を長く持ったことで、順調に進んだ子も進まなかった子も、自分の現状に対する自覚が、それぞれに持てたのではないかと思います。

<午後の部：ロールプレイング、修了式>

課外ワークショップ最後の時間は、言わばメインディッシュの企画として、特製の台本を使ったロールプレイングに取り組みました。この企画をメインに持ってきたのは、参加生徒の日常を見ていると、皆多かれ少なかれ、自分の従来のに固執し、新しい挑戦などをなかなかしないところがあるように思ったので、今回のような特別な時間にいろんな役割を演じてみることで新しい自分の可能性に気づいてほしい、と思ったからです。普段恥ずかしがりやのみんなのことなので、果たしてうまくいくのかどうか正直不安でしたが、ここまで3日間の時間が育んでくれた場の雰囲気のおかげで、特に抵抗なく、60種類用意した様々なシチュエーションにおける多種多様な役を、それぞれ工夫しながら演じてくれました。大成功！と言ってよい、楽しい時間が

過ごせました。

そして課外ワークショップの最後、大人、青年の参加者と合流し、総括の時間を取ったのですが、そこで、小中学生の部の参加者のためにこっそり用意しておいた、「修了証書」の授与式を行わせてもらいました。みなさんから温かい拍手をもらえて、有終の美を飾ることが出来ました。大人・青年の参加者のみなさん、ありがとうございました。そしてもちろん、小中学生の部に参加してくれたみんな、大変だったけどほんとうにいい時間が過ごせたと思います。どうもありがとう！



総括

今回、小中学生の部を担当させてもらって、特に今回参加してくれた子たちに関してですが、何より痛感させられたことは、みんながいかに「生きにくい」状況の中で、必死に生きているか、というようなことでした。夜眠れない、気分が流されてしまう、状況が理解出来ない、偏食がひどい、朝起きられない、自分のことがうまく表現出来ない、自信がなくてちょっとしたきっかけで投げやりになってしまう、自分の枠にこだわってしまう、等々、いずれも世間では「欠点」と片付けられてしまいそうなことばかりですが、それぞれがすべて彼らにとっての「生きにくさ」を構成する要素である以上の何物でもないと、ただただ感じさせられました。こうした特徴を「欠点」として責め立てるのではなく、「生きにくさ」の種として、それぞれ改善できる方向へなんとか働きかけていくこと、それが大人の役割であろう、としみじみ思いました。

3日間寝食を共にすると、普段のかかわりの中では観られていなかった、たくさんの方を観ることができたように思います。この経験は、各生徒、今後の指導に直接役立てていきたいと思っています。きちんと観ることなしに、きちんと接することは出来ない、あらためて感じさせられました。各ご家庭でも、あらためて、よく子ども達を「観て」あげてほしいと思います。

最後に、もう一つ、そんな大変な状況に気づかされながら走り回っている3日間だった中で、それでも自分の中で「やってよかった」と心から思うことが出来たのは、何より今回のワークショップを通して、「必死に伝えようとしたことは、100パーセントではなくとも、必ずきちんと伝わるのだ」ということを体感させてもらえたから、と言えらると思います。この3日間で何かは済む、というようなことは端から期待していません。ただ、それぞれの心に、日常では得られないであろう何らかのくさびを打ち込むことは、出来たのではないかと考えています。運営する側にとっても、ほんとうに学ぶことの多い3日間となりました。



たくさんのご参加、
ほんとうにありがとうございました！
今後とも勁草学舎の活動を
ご支援くださいますよう、
どうぞよろしくお祈いします！

スタッフ一同

